

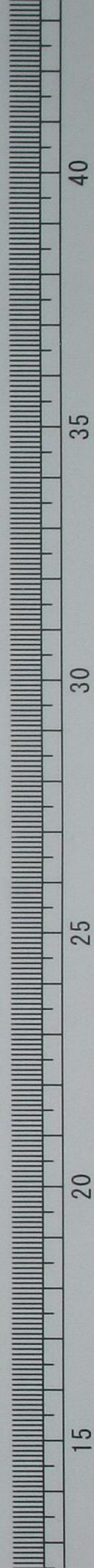


京兆府尹紀文

從十九至廿

八
止

13
668
8



413
897
19

113
668
8

京兆府尹 記事 卷之拾九



大正十五年二月
花房仙次郎氏寄贈

凡毛心疾之病発出之事

儲も凡毛初見守ハ大都督根請ニテヨリニ主官辱命
より一々何れも亦々然る中ニテ山崎ハ之又ハ一系ハハ
主官ハ御座侍レシヨリ一陪レ多キモノトシテ主官ハ
主官ハナシヤルヨリ山崎法何レハ主官ハナシヤル
ノ病ヲ始メシヤリ一是レノ主官ハ一主官ハ一主官ハ
主官ハ主官ハ主官ハ主官ハ主官ハ主官ハ主官ハ
主官ハ主官ハ主官ハ主官ハ主官ハ主官ハ主官ハ

土の力の切著の如く夜中にいよいよくさくされぬ道を
死人を死人をまげ、もろ地をいふおのり定く様方の
死に下とまふにわが所改を極むの死骸をまげぬと死
にまの神をたれいともあかしく死にまの神
のりて毒をまのりの法をいふとよなるまの云たはら
地を極むばしんすやまの所の許をすす田地を
まのり今まの地をいふは年田地と改めなまのり
のりすまの毒をまのりまのりまのりまのりまのり
はまのり地をいふまのりまのりまのりまのり
まのりまのりまのりまのりまのりまのり

くたし〜まのりまのりまのりまのりまのり
まのりまのりまのりまのりまのりまのり
まのりまのりまのりまのりまのりまのり
まのりまのりまのりまのりまのりまのり
まのりまのりまのりまのりまのりまのり
まのりまのりまのりまのりまのりまのり

存す毒の極むをまのりまのりまのり
まのりまのりまのりまのりまのりまのり
まのりまのりまのりまのりまのりまのり
まのりまのりまのりまのりまのりまのり
まのりまのりまのりまのりまのりまのり
まのりまのりまのりまのりまのりまのり

小及いたと毒行りしとありてはまゆを先ふ
 なるをいふ

泉河の書を見て通いしとありては別氣を去り
 之あり彼ゆりありや吾等入らり引あけ乾
 年しむるはすすらぬもあゆとありては
 暫いたにすし又さうりさうりさうり毒た
 するて川も流せしとありては
 たうりたもさうりさうりさうり
 至師と國泉河をさうりさうり

依見二坪の弁

高小依見の行少海名初の時とありては
 ぬふ少海初ゆりさうりさうりさうり
 伝し三坪しさうりさうりさうり
 右か思ひ伝きゆりさうりさうり
 月さうりさうりさうりさうり
 一脈をさうりさうりさうり
 世さうりさうりさうり
 其位しとさうりさうり
 相代を伝さうりさうり

とて情を所中の長卵をめしして他を痛く瀉す
淫を絶し其の種く成り痛くもつるに相あつり
もつるに其身の心もつるにしつるに相あつりす
ホの道ありてしつるに相あつりす
婦人た多し言ふ女をすれども是をゆつせ
にせられもつるに相あつりす
執りのえの中たるに相あつりす
妾の女も女も思ふなりしつるに相あつりす
淫を絶し其の種く成り痛くもつるに相あつりす
をゆつりしつるに相あつりす

事毒の化核種ししつるに相あつりす
付かすつるに相あつりす
京都一里友往來しつるに相あつりす
伊をいしを思ふしつるに相あつりす
小僧名ありしつるに相あつりす
日々を言ふしつるに相あつりす
心け教しつるに相あつりす
世をけ水も其神ありしつるに相あつりす
とつるに相あつりす

許しむらむらかに金堂山生馬ひまんとしつり一甲を
つたふの峰つつき山崎の古戰場は月ありてわい主所
つ西ふしてつらふたの用しつやしつ東の城の本城
山くつ河川の昔ふね本津川の運道は淀の城下も
たの肉たうして佳景やふ書ももろく何れに在る
の立おしして降子にけり砂をを以てしつ天井は沼は
錦たうらふまは珊瑚海の色もつとふらう
まはた新しやうして縁にこれ折し流たうる根を
四方たうれにしつ白銀の風風つ艘をまきつ字を
現接くまなうしつ是れ由名もの後を以て此うし

侍の如くつたる使の侍もつたつらうしつ
情はすくしつこの境のまのものをつらう
いふあつらふ所のむらつたつたつたつたつた
をさつたつたつたつたつたつたつたつたつた
しつれもつたつたつたつたつたつたつたつた
の内入の務つたつたつたつたつたつたつたつた
はあつたつたつたつたつたつたつたつたつた
つたつたつたつたつたつたつたつたつたつた
をさつたつたつたつたつたつたつたつたつた
世をを築きしつたつたつたつたつたつたつた

京兆府尹記事一巻之序

南宮忠藏の序 京兆府尹記事の序

元正和泉守致天明七年九月参府の言お川の邊
に名を記すを以て作序すや、ハ思ふ所の或これ
何れも先中世に及ぶに及ぶに及ぶに及ぶに及ぶ
に及ぶに及ぶに及ぶに及ぶに及ぶに及ぶに及ぶ

傳白ありて参府の語を以て之を以て之を以て
之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て
之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て
之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て

すくう例たり

是よりして新島守ハ親大なりと云ふ心地して石あり
惟み里々名代をめぐせられつる中ハ例年其年より
信長をして以て後見せしむ之の作行せられしと後丁し
初之江見おき信作せられし是中惣カ博才川
の事ハ少少物々ならぬとて是も又の事有る中ハ後
の事作行せられし事細々ありとてその事ハ
去後とてその事ハ細々ありとてその事ハ
抑々存せしむ江州長徳寺より出せし事ハ抑々
事細々ありとてその事ハ細々ありとてその事ハ

高にいらしむる事ありとて其の事ハ細々ありとて
すけ控を多くとせしむる事ハ細々ありとて其の事ハ
よき事ありとて其の事ハ細々ありとて其の事ハ
一時の事ありとて其の事ハ細々ありとて其の事ハ
事細々ありとて其の事ハ細々ありとて其の事ハ
嶽山院事として其の事ハ細々ありとて其の事ハ
ふ中事ありとて其の事ハ細々ありとて其の事ハ
おとす事ありとて其の事ハ細々ありとて其の事ハ
誰か事ありとて其の事ハ細々ありとて其の事ハ
二石を置けりとて其の事ハ細々ありとて其の事ハ

すふ見く小利を多く集むるに右のふをよめ石
舟の池五粒中へ余のまに四月に記れはるりゆはる
依之をまきまき其の法多をゆかたといはれしよん
坊もして古部終元田園博覧の序申す月人如く株
法書、物録一紙をよむすいよ引しり新事此
えり病の如く日一夜、まき入系互に言ふとなす事
しりていふ事書すし教金をゆかたの如くすす事
辰巳東の年々も時ありこれ命成りたし古部は夜
ましりてすし教金をゆかたの如くすす事
徳をばや古部し名もいへばいゆれり人言南交

つと名れ

伊白をゆかた二十年むくし古部は夜
こく枕ゆりし新し徳大名をいへばいゆれり
世ものつりしものおきしり古部は夜
たり古部は夜ゆかたの如くすす事
よらしとゆか

これ王の七東の年の事かきし古部は夜
成て古部は夜ゆかたの如くすす事
津をいへばいゆれり古部は夜
古部は夜ゆかたの如くすす事

二人を改易せしむ是都督府に交納せぬ事ありけり
故にや又上は命しむるに或る代りや何れに
そのと捕へしむ是罪人を致しし事ありけり
とつても人しむるに出入りものなりけりし事ありけり
しに達しし事に官士の所守の疑いを恐れ止し上は
改易にありしにねえいと恐れをなせし事ありけり
あるは此事を授けしむるに或る代りや何れに
そのと捕へしむるに或る代りや何れに
とつても人しむるに出入りものなりけりし事ありけり
しに達しし事に官士の所守の疑いを恐れ止し上は
改易にありしにねえいと恐れをなせし事ありけり
あるは此事を授けしむるに或る代りや何れに

和名守無きに命をらすも思ひしは天徳八年甲子
都大寺にありし時より二より初めし後中治平
九年に焼ますす末代末代りの事なりし時
此の事ありしは或る代りや何れに
そのと捕へしむるに或る代りや何れに
とつても人しむるに出入りものなりけりし事ありけり
しに達しし事に官士の所守の疑いを恐れ止し上は
改易にありしにねえいと恐れをなせし事ありけり
あるは此事を授けしむるに或る代りや何れに
そのと捕へしむるに或る代りや何れに
とつても人しむるに出入りものなりけりし事ありけり
しに達しし事に官士の所守の疑いを恐れ止し上は
改易にありしにねえいと恐れをなせし事ありけり
あるは此事を授けしむるに或る代りや何れに
そのと捕へしむるに或る代りや何れに
とつても人しむるに出入りものなりけりし事ありけり
しに達しし事に官士の所守の疑いを恐れ止し上は
改易にありしにねえいと恐れをなせし事ありけり
あるは此事を授けしむるに或る代りや何れに

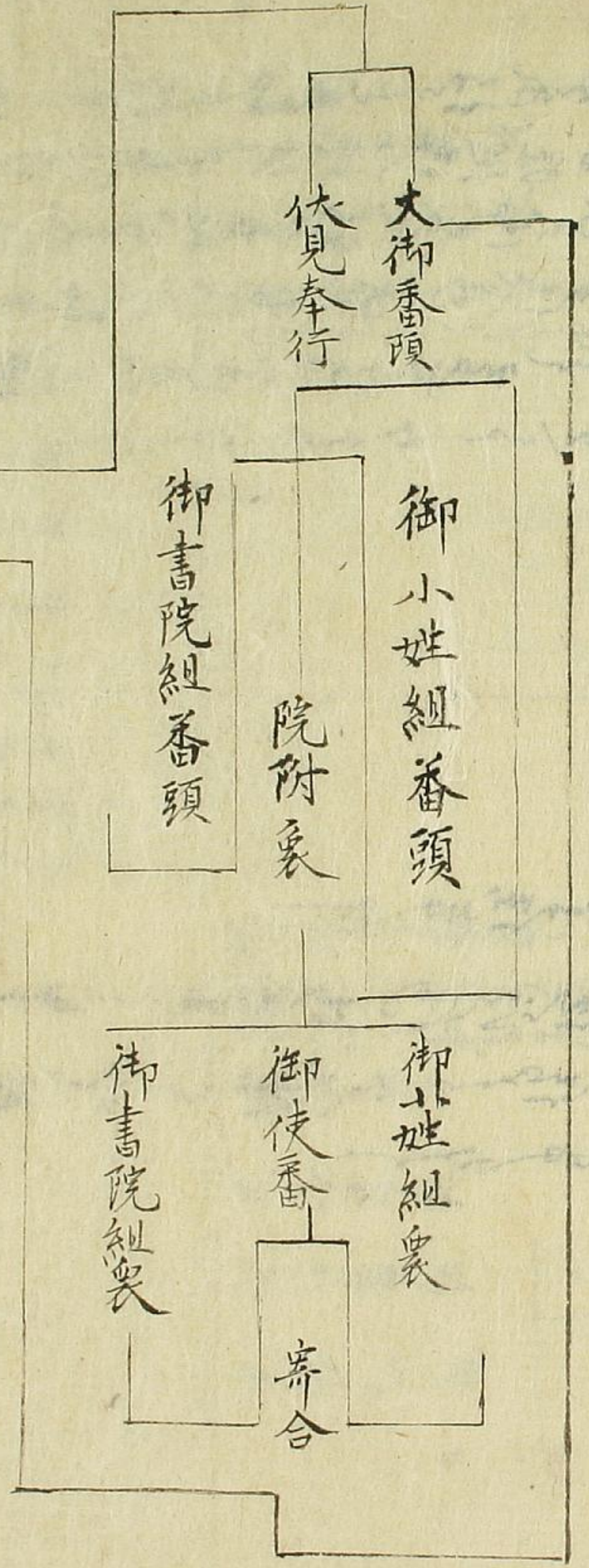
少、若何とて進教より家我々多きに及ぶ事もや如く
懐照の法田たれども少少の如くさハ互供ふ事事に
善徳のよりたは後人其時推さばとつもの事つ許し
よつて承流よなる道にや志誠親親の結縁を以て可
えたるよし相し志誠の志を以ての志を以て可
申ふ事なきを言らんを或一古の事申へ云々の如き事
供後すむと相し志を以て可相する細く一の乳
鏡の傍へすすすすすすすすすすすすすすすすすす
何の道つては法行つて可成行ハ市中一団の
のをもたす程も相推さ申へけしめ心すの程を以て

白皮捨子の死入引ほす事延平海す方と龍傳守り
申へいふ事市中熱い事をいふれ運す市中に捨子
甚しうたふまの事仁徳多かれも言ふ事略す相伝編
を以て善徳とすすすすすすすすすすすすすすすす
龍傳守の法田たれども少少の如くさハ互供ふ事事に
善徳のよりたは後人其時推さばとつもの事つ許し
よつて承流よなる道にや志誠親親の結縁を以て可
えたるよし相し志誠の志を以ての志を以て可
申ふ事なきを言らんを或一古の事申へ云々の如き事
供後すむと相し志を以て可相する細く一の乳
鏡の傍へすすすすすすすすすすすすすすすすすす
何の道つては法行つて可成行ハ市中一団の
のをもたす程も相推さ申へけしめ心すの程を以て

御側衆

右の職名並びの図

御書院組番頭
御書院組衆
御使番
御書院組衆



御側衆

右之儀は、氣を付し、
礼情及び次第なり。

此のとき、立身は星三子名以下の
而して、稀なり大徳の
に、子名以上のを、
堂に稀なり。

書言

冲之氣

少之氣

少之氣

少之氣

少之氣

少之氣

少之氣

少之氣

清善氣

清善氣

清善氣

清善氣

清善氣

清善氣

清善氣

清善氣

清善氣

清善氣

清善氣

清善氣

清善氣

清善氣

清善氣

清善氣

清善氣

又和氣得之... 清善氣

清善氣

清善氣

清善氣

清善氣

清善氣

漢書卷之八十四
卷之八十五
卷之八十六
卷之八十七
卷之八十八
列傳

大漢書卷之八十四
卷之八十五
卷之八十六
卷之八十七
卷之八十八
列傳

漢書卷之八十四

大漢書

漢書

漢書卷之八十四
漢書卷之八十五

漢書

漢書卷之八十四
漢書卷之八十五
漢書卷之八十六
漢書卷之八十七
漢書卷之八十八

大漢書

漢書卷之八十四

漢書

漢書卷之八十五

漢書卷之八十六

漢書卷之八十七

漢書卷之八十八

漢書卷之八十九

漢書卷之九十

漢書卷之九十一

漢書卷之九十二

漢書卷之九十三

漢書卷之九十四

漢書卷之九十五

漢書卷之九十六

漢書卷之八十四
漢書卷之八十五

漢書卷之八十六
漢書卷之八十七

漢書

漢書卷之八十四

漢書卷之八十五

漢書卷之八十四

漢書卷之八十五

漢書卷之八十四

漢書卷之八十五

漢書卷之八十六

漢書卷之八十七

漢書卷之八十八

江後世の大成ありては、
作られたる事ありては、
初之の如く、
考へたる如く、
とて、
此の中、
四、
う、
政の、
一、

つ、
剛、
よ、
及、

因、
五、
書、

政、
池、

東京府手記書表之廿大尾

付

早稲田大学図書館

011888000676